

# 悠悠莊

芥川龍之介

青空文庫



十月のある午後、僕等三人は話し合いながら、松の中の小みちを歩いていた。小みちにはどこにも人かげはなかった。ただ時々松の梢こずえみよどりに鶉こずえみよどりの声のするだけだった。

「ゴオグの死骸のを載せた玉突台たまつきだいだね、あの上では今でも玉を突いているがね。……」

西洋から帰って来たSさんはそんなことを話して聞かせたりした。

そのうちに僕等は薄苔うすごけのついた御影石みかげいしの門の前へ通りかかった。石に嵌めこんだ標ひょうさつ札さつには「悠々荘ゆうゆうそう」と書いてあった。が、門の奥にある家は、——茅葺かやぶき屋根の西洋館はひっそりと硝ガ

ラス子窓を鎖とぎしていた。僕は日頃ひごろこの家に愛着を持たずにはいられなかつた。それは一つには家自身のいかにも瀟洒しょうしやとしていた。めだつた。しかしまたそのほかにも荒廃こうはいを極きわめたあたりの景色に——伸のびび放題ほうだい伸のびびた庭芝にわしばや水の干上ひあがつた古池ふるいに風情ふぜいの多いためもない訣わけではなかつた。

「一つ中へはいつて見るかな。」

僕は先に立つて門の中へはいつた。敷石はきを挟はさんだ松の下には姫ひめ路め茸じだけなどもかすかに赤らんでいた。

「この別荘べつそうを持つている人も震災以来来なくなつたんだね。……」

するとT君は考え深はそうに玄関前げんかんまへの萩はぎに目をやつた後のち、こう僕

の言葉に反対した。

「いや、去年までは来ていたんだね。去年ちゃんど刈りこまなけりや、この萩はこうは咲くもんじやない。」

「しかしこの芝の上を見給え。こんな壁かべつち土も落ちているだろう。これは君、震災しんさいの時に落ちたままになっているのに違いないよ。」

僕は実際震災のために取り返しきづたのつかない打撃を受けた年少の実業家を想像そうぞうしていた。それはまた木蔭きづたのからみついたコツテエジ風の西洋館と——殊ガラスに硝子窓の前に植えた棕櫚しゅろや芭蕉ばしょうの幾い株くかぶかと調和しているのに違ちがいなかつた。

しかしT君は腰をかがめ、芝の上の土を拾いながら、もう一度

僕の言葉に反対した。

「これは壁土の落ちたのじやない。園芸用の腐蝕土だよ。しかも上等な腐蝕土だよ。」

僕等はいつか窓かけを下した硝子窓の前に佇んでいた。窓かけは、もちろん蠟引だった。

「家の中は見えないかね。」

僕等はそんなことを話しながら、幾つかの硝子窓を覗いて歩いた。窓かけはどれも嚴重に「悠々荘」の内部を隠していた。がちようど南に向いた硝子窓の框の上には薬壘が二本並んでいた。

「ははあ、沃度剤を使っていたな。——」

Sさんは僕等をふり返つて言った。

「この別荘の主人は肺病患者だよ。」

僕等は芒の穂を出した中を「悠々荘」の後ろへ廻つて見た。そ

こにはもう赤錆のふいた亜鉛葺の納屋が一棟あつた。納屋

の中にはストオヴが一つ、西洋風の机が一つ、それから頭や腕の

ない石膏の女人像が一つあつた。殊にその女人像は一面に埃

におおわれたまま、ストオヴの前に横になつていた。

「するとその肺病患者は慰みに彫刻でもやつていたのかね。」

「これもやつぱり園芸用のものだよ。頭へ蘭などを植えるもので

ね。……あの机やストオヴもそうだよ。この納屋は窓も硝子にな

っているから、温室の代りに使つていたんだらう。」

T君の言葉はもつともだった。現にその小さい机の上には蘭科植物を植えるのに使うコルク板の破片も載せてあった。

「おや、あの机の脚の下にヴィクトリア月経帯の缶もころがっている。」

「あれは細君の……さあ、女中のかも知れないよ。」

Sさんは、ちよつと苦笑して言った。

「じゃこれだけは確實だね。——この別荘の主人は肺病になって、それから園芸を楽しんでいて、……」

「それから去年あたり死んだんだろう。」

僕等はまた松の中を「悠々荘」の玄関へ引き返した。

花芒

はいつか風立っていた。



「僕等の住むには広過ぎるが、——しかしとにかくいい家だね。

……」

T君は階段を上りながら、あがひとりごと  
「独言のようにこう言った。

「このベルは今でも鳴るかしら。」

ベルは木蔦きづたの葉の中にわずかに釘ボタンをあらわしていた。僕はその

ベルの釘へ——象牙ぞうげの釘へ指をやった。ベルは生憎あいにく鳴らなかつ

た。が、万一鳴ったとしたら、——僕は何か無気味ぶきみになり、二度

と押す気にはならなかった。

「何なんと言ったつけ、この家の名は？」

Sさんは玄関たたずに佇んだまま、突然誰にもなしに尋ねかけた。

「悠々荘？」

「うん、悠々荘。」

僕等三人はしばらくの間、あいだ何の言葉も交さずかわに茫然と玄関たたずに佇んでいた、伸び放題伸びた庭芝にわしばだの干上ひあがった古池だのを眺めながら。

(大正十五年十月二十六日・鵜沼)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「サンデー毎日」

1927（昭和2）年1月

入力：j.utiyama

校正：小林繁雄

2005年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 悠々荘

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>